

P3-A-0962**頸髄症患者の術後 3 ヶ月の下肢機能と QOL に影響を与える因子についての検討**

石川 大瑛, 畠山 優, 阿部 寛子, 柏木 智一, 山内紗貴子, 伊藤 麻子, 豊口 卓,
本間 昌大, 笹島 真人
大館市立総合病院

key words 頸髄症・JOACMEQ・FTT

【はじめに、目的】

頸椎症性脊髄症(以下、頸髄症)は、中高年より発症し、上下肢に運動障害を引き起こす。頸髄症の治療法としては手術療法の有効性が示されており、治療の有効性の評価として患者立脚型評価スケールである日本整形外科学会頸部脊髄症評価質問票(Japanese Orthopedic Association Cervical Myelopathy Evaluation Questionnaire: JOACMEQ)が開発された。しかし、術前後の運動機能と JOACMEQ の経過の報告はまだ不十分である。そこで本研究では術後 3 ヶ月までの頸髄症術前後の運動機能と JOACMEQ の経過とその関連性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は当院整形外科にて頸髄症と診断され、手術を施行された 33 名とした(男性 17 名, 女性 16 名, 平均年齢 69.2 ± 8.4 歳)。取り込み条件は頸椎症性脊髄症もしくは後縦靱帯骨化症にて頸椎拡大術を施行された患者でかつ術後 3 ヶ月以上経過しているもの、除外条件としては頸椎固定術を施行されたもの、脳血管疾患など運動に影響を及ぼす疾患の既往があるもの、認知症など質問紙法による評価が困難なものとした。

評価内容は、日本整形外科学会頸部脊髄症治療判定基準(以下、JOA スコア)合計値、JOACMEQ 下肢運動機能スコア、10 m 歩行テスト、30m 歩行テスト、Foot Tapping Test(以下 FTT)、下肢痛、下肢のしびれ、FIM とした。FTT は左右の最小値を採用した。また下肢痛、下肢のしびれは Visual Analog Scale(以下、VAS)を用いて評価した。評価は術前、術後 3 ヶ月時とした。各スコアの術前後の変化量も算出した。

統計学的解析は、術前後の差には対応のある t 検定を実施した。また、術後 3 ヶ月の JOACMEQ 下肢運動機能スコアの変化量を従属変数、その他の項目を独立変数とした重回帰分析を行った。分析には SPSS16.0J を用い、有意水準は 5% とした。

【結果】

差の検定では JOA スコア合計値(術前 10.4 ± 2.5 , 術後 13.3 ± 2.4 , $p < 0.05$), JOACMEQ 下肢運動機能スコア(術前 67.7 ± 29.2 , 術後 72.2 ± 25.3 , $p < 0.05$)と FTT(術前 21.1 ± 6.6 , 術後 25.6 ± 6.6 , $p < 0.05$)が術後有意に高値であった。術後 3 ヶ月の JOACMEQ 下肢運動機能スコアを従属変数とした重回帰分析では、術前の JOACMEQ 下肢運動機能スコア ($B = 0.848$, 95% 信頼区間: $0.616 \sim 0.864$), 術後の下肢痛 ($B = -0.226$, 95% 信頼区間: $-0.315 \sim -0.069$), FIM の術前後の差 ($B = 0.177$, 95% 信頼区間: $0.179 \sim 1.49$) が抽出された ($p < 0.05$, $R^2 = 0.892$)。

【考察】

当院では頸椎術後リハビリを入院外来合わせ 3 ヶ月ほど行っている。そのため、術後 3 ヶ月時点をアウトカムとし研究を行った。その結果、QOL の指標となる JOACMEQ 下肢運動機能スコアと神経兆候の指標となる FTT が有意に改善していることが明らかとなった。これは頸椎の手術によって下肢の神経兆候の改善により QOL が改善することが考えられる。また、重回帰分析により、術後の QOL を高くするためには、術前の QOL が低下していないこと、手術により下肢痛が改善すること、ADL が改善することが必要であると考えられた。このことから頸椎術後の QOL 改善のために、手術による侵襲による影響を考慮しながら ADL の改善させていくことを目標にリハビリを進めていく必要があると考えられた。本研究の限界としては、下肢のみの検討となっていること、また、重症度の検討も不十分であることが挙げられる。そのため、今後は術前の重症度や上肢等も含めた機能、能力の検討を行っていく必要があると考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

頸髄症患者は手術により QOL が改善し、それには ADL の改善が影響を及ぼしていることが明らかとなったと考えられる。そのため、患者 QOL 改善のためにも ADL 改善のための理学療法が重要であると考えられる。